寄枕戀

ひとりねのありかずとてや積りぬる塵もはらはじつげのを枕

寄衣戀

むらさきの根ずりの衣かさねこし君がゆかりの色もなつかし

寄弓戀

僞のまゆみつきゆみ年ふれどおきふしきみを待たぬまぞなき

雜二十首

曉鷄

寢覺するあかつきやみのうつゝにも夢にも鳥の聲ぞきこゆる

夜燈

ながき夜の心のやみのしるべせよなほ殘りける法のともし火

嶺松

みよし野の青根が峰の名もしるし常磐に見ゆる松のむらだち

夫木抄第三句「名もしるく」に作る、

里竹

思ひ入るみやまの里のしるしとてうき世へだつる窓のくれ竹

磯巖

たちかへり波はひけどもあづさ弓磯の岩根はつれなかりけり

嶋鶴

をぐろ崎みつの小島にあさりする鶴ぞなくなる波たつらしも

岡篠

さゝの葉のさやぐ霜夜は水莖の岡のやかたにふしぞわづらふ

江葦

霜がれの入江になびくながれ葦のしづむ下葉は色もかはらず

浦船

朝日さすかたの浦風しづかにて今日は出でそふ蜑のつりぶね

杣山

斧の柄も朽木のそまの山人は世をつくしてやみや木ひくらし

岸苔

すみよしと思はむ人のためなれや岸にしくてふ苔のさむしろ

山家水

ながらへばすみもやすると庵しめて見れば濁れる山の井の水

山家嵐

絶えず吹くみ山嵐はかはらねどたゞ宿からぞさびしかりける

田家雨

小山田のいなばのこらずかり庵にいたづらにもる夜の雨かな

旅行

かぎりなく遠くなりゆく都かなすみだ河原のわたりしてけり

旅宿

旅人の入野の尾花かりふきてつくれるいほにむすぶたまくら

旅泊

行きめぐりいざ言とはむとまりぶねこふる都の人もありやと

海眺望

今もまた松浦の海に見わたせばいやとほざかる舟出かなしも

寄社祝

石清水きよきこゝろにすむといふ神のちかひは猶もたのもし

新後撰集第三句「すむときく」に作る、

寄日祝

ひさかたの天の岩戸をあけしより出づる朝日はくもる時なし

續千載集第二句「天の岩戸の」下句「出づる朝日ぞ曇る時なき」に作る、

〔以上寶治御百首〕

早春霞

いづくより春は來ぬらむ天の戸のあくるを待たずたつ霞かな

山花

見てもなほ奥ぞゆかしきあしがきの吉野の山の花のさかりは

五月郭公

里なれて今ぞ鳴くなるほとゝぎす五月を人は待つべかりけり

初秋風

秋といへばあへず色づく木の葉かな今朝こそ風の音は身にしめ

海邊月

鹽竈の浦のけぶりも絶えにけり月見むとてのあまのしわざに

續後撰集第二句「浦のけぶりは」第五句「あまのしわざか」に作る、

野外雪

いとゞ又かぎりも見えず武藏野やあまぎる雪のあけぼのゝ空

此御製新拾遺集には寶治元年として載せたり、

忍久戀

つれなきもいはねばこそと思はずば年月いかで永らへもせむ

此御製新後撰集には寶治元年として載せたり、

逢不會戀

明しかね待たるゝものとなりにけりさしも厭ひし鳥の八聲を

旅宿嵐

松が根の枕定めむことぞなきいかにはげしき夜半のあらしぞ

社頭祝

わが末の絶えずすまなむ五十鈴川底にふかめて清きこゝろを

〔以上寶治二年院御歌合〕

初秋露

ぬれてほす野原の草の露のまに干とせの秋のいつか來ぬらむ

山家秋風

新後撰集第一句「山ふかき」に作る、

山ふかみすまひからにや身にしむと都の秋のかぜをとはゞや

朝草花

わすれずよ朝ぎよめするとのもりのそでにうつりし秋萩の花

暮山鹿

新後撰集第一句「暮れゆけば」に作る、

暮れゆけど端山しげ山さはり多み逢はでや鹿の妻を戀ふらむ

霧間鴈

久方のあまぎる霧のたえ〳〵にそれかと見えて鴈は來にけり

名所月

月もなほながらに朽ちし橋柱ありとやこゝにすみわたるらむ

田家月

月よよし夜よしとぞ見る我門のわさ田おしなみほに出づる頃

行路紅葉

散らぬより紅葉や路を埋むらむ見てすぎゆかむかたも忘れて

寄煙忍戀

しのぶともうはの空にや知られまし戀に煙のたつよなりせば

寄月恨戀

こぬ人によそへて待ちしゆふべより月てふ物は恨みそめてき

〔以上建長三年九月十三夜影供歌合〕

春

年中立春

初音とはおもはざらなむ一年にふたゝびきたる春のうぐひす

都初春

もろ人の袖をつらねてたちまふに春きたりとも見ゆる宿かな

子日松

子日とて今日ひきそむる小松原こだかきまでを見るよしもがな

海霞

ひさかたのあまの汐くむ袖なれやかすみにかゝるおきつ白波

澤若菜

うらやまし年はつめども澤に生ふる草をば人の若菜とぞいふ

梅浮澗水

谷川のそのみなかみに梅の花ありとやこゝにながれきぬらむ

浦春月

ところがら光かはらぬ春の月あかしのうらはかすまずもがな

（續拾遺集第二句「光かはらば」に作る、）

曉花

これもまた有明のかげと見ゆるかな吉野の里の花のしらゆき

（新拾遺集第四句「吉野の山の」に作る、）

花下忘歸

見る人の家路わするゝ花ざかりなどしもかへる春のかりがね

（新後撰集第一句「皆人の」第四句「なぞしもかへる」に作る、）

野花

雪とのみふるから小野の櫻花なほ木のもとはわすれざりけり

霞中花

たちかくす花をばしらずおほかたの霞ぞにほふ春のあけぼの

松下躑躅

咲きまじる山の躑躅の春の色をいはねの松にかけて見るかな

夕欵冬

暮れぬとも遠方人にことはむいはぬいろなる花はなにぞも

浦藤

こゝろあるあまや植ゑけむ春ごとにふぢ咲きかゝる松が浦島

春欲暮

たえてみるわれをつれなくおもふらむ春くれがたの有明の月

夏

盧橘初開

むかしへの匂ときけどたのまれずけさ開けたる軒のたちばな

閑中五月雨

曇る日の五月雨しげきこのごろはわが影だにも見えぬ宿かな

深夜鵜河

かたぶけば山かげくらきおほゐ川月にもくだす鵜舟なりけり

島夏草

駒なべて野島をすぐるかちびとのゆゑゑも見えずしげる夏草

河夏祓

河邊なるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈るけふかな

夫木抄第三句「かりびとの」に作る、

秋

織女契久

七夕のあまの羽衣いはなでゝつきぬや今日のためしなるらむ

荻驚夢

さらでだにねざめがちなるおいらくの夢なさましそ荻の上風

嶺鹿

ゆふぐれは小倉の山の峯つゞき鹿もあはれにたへぬこゑかな

遙聞鹿

嵐山あらしにつけてきこゆなりならびの岡のさをしかのこゑ

池上月

おほぞらの雲こそあらめ月すめば池をも風のはらふ夜半かな

獨對月

まくらにもあとにも人のなき閨に起きゐて見つる秋の夜の月

擣衣到曉

夕づく夜月みがてらはいかゞせむあかつきやみにうつ衣かな

山路菊

消えぬまや千とせなるらむ朝ごとに山路の菊におけるしら露

水邊菊

汲みてこそ千年もかねて知られけれぬれてほすてふ菊の下水

松間紅葉

深緑ひとつこずゑと見し松のけぢめことなるもみぢなりけり

紅葉映水

木のもとをかけはなれたる山の井にうつるも淺き薄紅葉かな

冬

杜時雨

津の國の生田の杜のゆふしぐれそではぬるやと人のとへかし

原雪

行く駒のあしにまかせて見つるかなしらぬの原のけさの初雪

濱邊雪

八十日ゆく濱の眞砂路はるゞとかぎりしられずつもる白雪

續拾遺集第一句「八百日ゆく」第四句「かぎりも見えず」に作る、

磯雪

波よする磯のすさきのひとつ松こずゑばかりにつもるしら雪

戀

寄岡戀

たのめおきし跡をたのみて水莖の岡のやかたに人を待つかな

寄沼戀

隱沼に生ふる菖蒲はわれなれやしげきうきねも知る人ぞなき

續拾遺集第二句「生ふる菖蒲の」に作る、

寄菖蒲戀

いつまでかあやめもしらぬ菖蒲草けふ顯れてねこそなかるれ

寄千鳥戀

よもすがら友なし千鳥なきわびぬ我ばかりやはもの思ふらむ

寄垣戀

年月をなかにへだつる篠垣のひとよふたよも逢ふよしもがな

夫木抄第四句「ひとよふたよに」に作る、

寄鏡戀

かたみとて見るもはかなします鏡とまらざりける人の面かげ

寄筵戀

いつまでかしき忍ぶべきそのまゝにわが塵はらふ床のさむしろ

雜

社頭鶏

昔たれあかつきふかくみそぎしてゆふつけ鳥の名を殘すらむ

新嘗祭

ちぎりあれや神のすごもをうちはへて新嘗まつる昔おもへば

仁王會

千々の人命のべけむたゞしよりもゝさのうへに說ける御法ぞ

維摩會

神無月しぐれふりおける御法とて奈良のみやこに殘る言の葉

山狩獵

かりびとのやのゝ神山身にかへて妻かくしぬと鹿ぞなくなる

披書知昔

昔人やいかなる繩をむすびおきて今にその世の事をしるらむ

夫木抄第二句「いかなる花を」に作る、

羇中雨

村雨の過ぐるを待たでいそぐかなとまるも遠き道とおもへば

羇中船

袖の香やなほとまるらむたちばなの小島によせし夜半の浮舟

名所瀧

今も又ゆきても見ばやいそのかみふるの瀧つ瀬あとを尋ねて

名所津

今もなほ冬ごもりする難波津にむかしおぼゆる梅の香ぞする

名所崎

から崎の松ものいはゞこととはむ志賀の都のむかしいかにと

山家風

風だにも一かたよりぞかよひける山たちめぐるふもとなる庵

山家垣

心にはうき世へだつとおもへどもなほ事しげし庭のさゝがき

寄枕述懐

わが肱を枕にしつゝ思ふかなげにたのしびはこれに過ぎじと

寄笛述懐

夫木抄第四句「げにたのしみは」に作る、

末の世と思ふもひさしより竹はきりてぞ笛の音をもたてける

〔以上文永二年七月七日白河殿七百首〕

夫木抄第二句「思ふもわびし」に作る、

未出月

大ぞらの雲をのこさずふきなして風も月まつけしきなるかな

初昇月

雲のみか山の端ちかき夕ぐれは月もよこぎるひかりなりけり

停午月

久かたの空にや月もやすらはむ秋のなかばにこゝろとゞめて

漸傾月

月は今軒端の松のかげにこそかたぶきそむるほどは見えけれ

欲入月

續古今集第二句「雲ものこらず」に作る、

有明のそらにぞ似たる山の端に入りかゝりたる月のおもかげ

〔以上文永二年八月十五夜歌合〕

續古今集第四句「入りかゝりぬる」に作る、

河月

おほぞらの月はひとつをあすか川七瀬の澱にいかですむらむ

野鹿

ねられずや妻を戀ふらむしめのゆき紫野ゆきしかぞ鳴くなる

山紅葉

外よりは時雨もいかゞ染めざらむ我が植ゑて見る山のもみぢ葉

不逢戀

いたづらにめぐりもあはず戀ぐさの七車までとしは積めども

絶戀

妹もわれ花田の帶のなかなれや色かはりぬと見れば絶えぬる

〔以上文永二年九月十三夜龜山殿五首御歌合〕

續拾遺集第四句「色かはるかと」に作る、

位におまし〳〵ける時うへのをのこども題を探り

て歌つかうまつりけるついでに霞を

敷島やまと島根のあさがすみもろこしまでも春は立つらし

建長元年二月前太政大臣の家に行幸ありてしばし

内裏になりにける頃梅の花さかりに咲きけるよし

きこしめして人して結びつけさせ給うける

色も香もかさねてにほへ梅の花こゝのへになる宿のしるしに

建長二年江上春望といへる題にて詩歌を合せられ

侍りしついでに

新三十六人撰下句「もろこしかけて春や立つらむ」に作る、

むらさきの藤江の岸の松が枝によせてかへらぬ波ぞかゝれる

曉鹿といふことをのこどもつかうまつりけるつ

いでに

秋の夜のながきおもひや通ふらむおなじ寐覺の小男鹿のこゑ

建長二年九月山中秋興といふ題にて詩歌を合せら

れしついでに

いにしへの跡をたづねて小倉山みねの紅葉やゆきて折らまし

人々に十首の歌めされしついでに

忍ぶるぞかなはざりけるつらきをも憂きをもしるは涙なれども

前のおほきおほいまうちぎみの吹田の家に御幸あ

りし時人々に十首の歌めされしついでに旅

河舟のさしていづくかわがならぬ旅とはいはじ宿とさだめむ

寶治二年前のおほきおほいまうちぎみの西園寺の

家に御幸ありて歸らせ給ふ御おくりものに代々の

みかどの御本奉るとてつゝみ紙に「つたへきくひじ

りの御代の跡を見てふるきをうつす道ならばなむ」

と書きて侍りけるに御返し

知らざりし昔に今やかへりなむかしこき世々の跡ならひなば

鳥羽殿にはじめてわたらせ給ひて池邊松といふこ

とを講ぜさせ給うける時

かげうつす松にも千代のいろ見えて今日すみそむる宿の池水

子日のこゝろを

増鏡一本第四句「かしこきみよの」に作る、

いざ今日は小松が原に子日して千代のためしに我もひかれむ

吹田にて十首の歌めされしついでに祝

きてみれば千代もへぬべし高濱の松にむれゐる鶴の毛ごろも

〔以上續後撰集〕

子日のこゝろを

子の日せし千代の古道跡とめてむかしを戀ふる松も引かなむ

建長六年三月歌合に鶯を

おほかたの春のけしきにさそはれてしるべもまたぬ鶯のこゑ

五十首の歌の中に江上霞

見ずばまたくやしからまし水の江の浦島かすむ春のあけぼの

龜山の仙洞に吉野山の櫻をあまた移し植ゑ侍りし

が花の咲きけるを見て

春ごとにおもひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ

弘長二年十首の歌講じはべりしに靜見花といふこ

とを

めかれせぬ宿の櫻の花ざかりわがこゝろさへ散るかたぞなき

夕菫菜といふことを

あさぢふのをのゝ芝生の夕露にすみれ摘むとてぬるゝ袖かな

殘花のこゝろを

たづねばや青葉の山のおそざくら花ののこるは春のとまるか

六帖の題にて歌よみ侍りし時すゝきを

絲薄こなたかなたに植ゑおきてあだなるつゆの玉の緒にせむ

鳥羽にて里月を

里の名も久しくなりぬやましろのとはに逢ひ見む秋の夜の月

五十首の歌の中に見月

幾めぐりなれぬる秋を思ふにも老いてぞ月にあはれそひける

山家擣衣を

山彦のこたふる宿のさよごろもわがうつ音やよそにきくらむ

文永二年八月をのこども詩をつくりて歌にあはせ

侍りしに水郷秋望といふことを

たれをかもこゝろもうきて河霧のそらにまつらむ宇治の橋姫

九月のころ眞親龜山の仙洞にまゐりて侍りし又の

日つかはし侍りし

きのふけふ散りこそまされ見し人の心もとめぬ宿のもみぢ葉

弘長二年龜山の仙洞にて人々十五首の歌よみ侍り

しに朝寒蘆を

朝あらしの山のかげなる河の瀬に波よるあしの音のさむけさ

三首の歌講じ侍りしついでに河氷を

あすか川ゆく瀬の水のうすごほり心ありてやよどみそむらむ

寛元二年十一月東三條神樂の夜つかはし侍りし

白雪のふりにし跡にかはらねばこよひや神もこゝろとくらむ

三百首の歌の中に錦を

小車のにしき手向くる神路山まためぐりあふとしは來にけり

八幡にこもり侍りし時

石清水こがくれたりしいにしへをおもひ出づればすむ心かな

住吉の社の遷宮の後くまのに詣でゝ侍りしついで

にかの社によみて奉りしうた

神よかみなほすみよしと見そなはせわが世にたつる宮柱なり

熊野川の舟にて

熊野川せぎりにわたす杉舟のへなみにそでのぬれにけるかな

月の夜座禪のついでに

何とかは月やあらぬとたどるべきわがもとの身を思ひ知りなば

非有非空のこゝろを

大空をむなしと見れば絲遊のあるにもあらずなきにしもなし

法華經序品　以是知今佛欲說法華經

法の花いまも古枝に咲きぬとはもと見し人やおもひいづらむ

龜山の仙洞の持佛堂の供養に法印聖憲を導師にめして女郎花の枝に菩提子の念珠をかけて布施にたまはすとてつけ侍りし

名にめでし嵯峨野の秋のをみなへし花も菩提の種と知らずや

三百首の歌の中に都鳥を

みやこどりなに言とはむおもふ人ありやなしやは心こそ知れ

弘長二年十首の歌講じ侍りしに忍待戀を

我さへにまたいつはりになりにけり待つといひつる月ぞ傾く

建長二年歌合し侍りしに忍戀を

とはぬをも誰がつらさにかなしはてむ形見に忍ぶ心くらべに

稀逢戀

あふことの稀なるものは秋を待つ紅葉の橋とわが身なりけり

五十首の歌の中に絶戀を

心にもまかせばとこそたのまるれたえ〴〵なれど中川のみづ

右大將通雅の母みまかりての頃おなじおもひにて

粟田口の山莊にこもり居て侍りし春の花の頃つか

はし侍りし

雨となり雲となりにしかたみにもまがふ櫻のいろや見るらむ

文永元年春鶯尾の花しのびて見侍りし時

なつかしき香にこそにほへ袖ふれし代々のむかしの花の下風

三百首の歌の中に戀

黑髪は筋かはれどもこむらさき我がもとゆひの色ぞつれなき

前左大臣神無月のころ山科の山莊に侍りけるに時

雨し侍りける日女房の許に「時雨のみおとはの里は

ちかけれどみやこの人のことづてもなし」とよみて

おくり侍りしに院の御返し

とはずとも音羽の里の初しぐれこゝろの色はもみぢにも見よ

熊野に詣で侍りしついでに住吉にて浦の松を

みつ汐も岸べはるかになりはてゝ今はうらなるすみよしの松

龜山の仙洞にてよみ侍りし歌の中に

わが宿の物かあらぬかあらし山あるにまかせて落つる瀧つ瀨

三百首の歌の中に島を

ありあけの空にわかれしいもが島かたみの浦に月ぞのこれる

六帖の題の歌の中に國を

ひさかたのあめよりおろす玉鉾の道ある國ぞいまのわがくに

建長六年正月柿本の影供し侍りしに眞影をわたし

つかはすとて包紙に書きつけ侍りし

今日をいかにみそなはすらむ昔より身を離れたる影しなければ

述懐の歌に

さゝたけのわがよの程の思出にしのばれぬべき一ふしもがな

三百首の歌の中に雜

ぬるが中に思の外のことも見つ夢よいかなるものと知らばや

弘長三年今上龜山の仙洞に行幸ありけるに御歸り

の日の御おくり物に御本を鶯のゐたる梅の枝につけて奉りしに書きつけ侍りし

梅が枝に代々のむかしの春かけて變らずきゐるうぐひすの聲

正元元年三月大宮院西園寺にて一切經供養せられし日行幸侍りしに東宮おなじく行啓ありてつぎの日人々翫花といふことを講じ侍りしに

色々にえだをつらねて咲きにけり花も我が世も今さかりかも

前内大臣この集かきてたてまつるとてつゝみがみに「このたびと波よせつくす玉津島みがくみことを神はうくらし」と書きつけ侍りしに御返し

和歌の浦に波よせかくる藻鹽草かきあつめてぞ玉も見えける

〔以上續古今集〕

増鏡一本第二句「そでをつらねて」第五句「けふ盛かも」に作る、

建長六年三首の歌合に梅を

袖ふればいろまでうつれくれなゐの初花ぞめに咲ける梅が枝

春の御歌の中に

吹く風のさそふ匂をしるべにてゆくへさだめぬ花のころかな

鵜河をよませ給うける

夕やみにあさ瀬しら波たどりつゝみをさかのぼる鵜飼舟かな

初秋の心をよませ給うける

さらでだに夏をわするゝ松かげの岩井のみづに秋は來にけり

秋の御歌の中に

おく露は色もかはらぬゆふべかなわが身ひとつの墨染のそで

秋依月勝といへる心を

わきてこの心づくしは秋ぞとも木の間の月のかげよりぞ知る

駒迎を

年を經て雲のうへにて見し秋のかげもこひしきもちづきの駒

建長二年八月十五夜鳥羽殿の歌合に月前風を

いにしへの風もかはらぬ我宿はすみなれてこそ月も見るらめ

紅葉盛といへる心を

枝かはすよその紅葉にうづもれて秋はまれなる山のときは木

百首よませ給うけるに

少女子が袖しろたへに霜ぞおく豐のあかりも夜やふけぬらむ

寄月戀

いとせめてしのぶる夜半の涙とも思ひもしらでやどる月かな

戀の御歌の中に

わが涙あふをかぎりとおもひしになほいひしらぬ袖の上かな

なか〳〵に面影さらぬかたみにて今はあだなる夜半の月かな

寄海戀といふことをよませ給うける

憂きことは津守のあまの朝夕に恨むとだにも知らせてしがな

雜の御歌の中に

いつとなく今はならひのねざめにて老いてしらるゝ曉のそら

華嚴經の心をよませ給うける

谷の戸はまだあけやらず思ふらむたかき峯には日影さすなり

寶塔品

いにしへも今もかはらぬ月影を雲のうへにてながめてしがな

觀無量壽經　水想觀

水の面にうつりうつらぬ影にこそ澄みにごりける心をば知れ

神祇の御歌の中に

男山老いてさかゆくちぎりあらばつくべき杖も神ぞきるらむ

榊とりますみのかゞみかけしより神の國なるわがくにぞかし

日吉の社に御幸の時よませ給うける

道あれどわが世を神に契るとて今日ふみそむる志賀の山ごえ

〔以上續拾遺集〕

暮春のこゝろを

暮れてゆく春の手向やこれならむ今日こそ花はぬさと散りけれ

建長三年秋吹田にて人々歌つかうまつりけるに

いたづらに野澤に見ゆるほたるかな窓にあつむる人やなからむ

秋の御歌の中に

たが袖に秋まつほどはつゝみけむ今朝はこぼるゝ露のしら玉

よそに又野はなければや小男鹿のこゝにしも鳴く聲の聞ゆる

關月といへるこゝろを

くもりなく月もれとてや河口の關のあらがきまどほなるらむ

初冬のこゝろを

かきくらし雲のはたてぞしぐれゆく天つ空より冬や來ぬらむ

離別の御歌の中に

こゝろとや行くも歸るもなげくらむ人やりならぬひなの別路

授記品

雲葉集詞書「秋たつ心を」に作る、

更けゆけば出づべき月と聞くからにかねて心の闇ぞ晴れぬる

下輩觀をよませ給うける

おろかなる涙の露のいかでなほ消えてはちすの玉となるらむ

戀の御歌の中に

こゝろのみかぎり知られぬみだれにて幾年月を忍ぶもぢずり

忍ぶるもためしあらじと苦しきをあらはれば又いかゞ歎かむ

寄月戀を

かへるさのわかれのみかは待つ人のつれなきもうき有明の空

白河殿の七百首の歌に恨不逢戀といふことを

年月はあはぬ恨とおもひしにうらみてあはずいつなりにけむ

文永五年九月十三夜白河殿の五首の歌合に河水澄

月を

われのみや影もかはらむ飛鳥川ふちせもおなじ月はすめども

文永五年九月十三夜白河殿の五首の歌合に暮山紅葉を

かねてより袖もしぐれて墨染のゆふべいろまさる山のもみぢ葉

雑の御歌の中に

道あれとなにはのことも思へども蘆わけ小舟さすぞとほらぬ

〔以上新後撰集〕

増鏡下句「同じふちせに月はすむとも」に作る、

増鏡第五句「峯のもみぢ葉」に作る、

拾遺風體集第二句「なにはのことを」に作る、

建長二年詩歌合に江上春望といふ心をよませ給うける

難波潟入江にたてるみをつくしかすむぞ春のしるしなりける

山時雨といふことをよませ給うける

吹きすぐる檜原の山のこがらしに聞きもわかれぬ村時雨かな

雪をよませ給うける

ゆく水にうかぶ木の葉のひまをなみこほらぬ上もつもる白雪

後深草院位の御時花のさかりに上達部殿上人鞠つかうまつりけるを御覽ぜられける由きこしめして

松の枝にまりつけて奉らせ給ふとて結びつけさせ給うける

吹く風もをさまりにける君が代の千年の數はけふぞかぞふる

文永三年三月續古今集の竟宴行はせ給ふとてよませ給うける

三代までにいにしへ今の名もふりぬひかりをみがけ玉津島姫

浄金剛院にてよませ給うける

幾里かあらしにつけてきこゆらむわがすむ寺のいりあひの鐘

三首の御歌の中に竹を

此君の御代かしこしと吳竹のすゑ〳〵までもいかでいはれむ

雜の御歌の中に

さゝがにの蜘蛛のふるまひ哀なりこれも心のすぢは見えつゝ

〔以上玉葉集〕

雲葉集詞書「建長五年三月にはじめて天王寺へ御幸侍りけるついでに住の江にて人々歌つかうまつりし時」に作る、

建長五年住江に御幸侍りて行旅述懷といふことを講ぜられ侍りけるによませ給うける

跡垂れし神代に植るばすみよしの松も千年をすぎにけらしも

〔以上續千載集〕

思順上人扇をわすれてまかり出でにける後にたまはせける

たとへ來し扇もさこそわするらめ月をも月とわかぬこゝろに

文永八年七月白河殿にて人々題をさぐりて歌つかうまつりけるついでに不逢戀を

なみだのみもるや關屋の板びさしあはぬ月日をさて過しつゝ

絶戀を

とにかくに苦のみだれておもへども絶えて年ふる久米の岩橋

文永八年七月七日白河殿にて人々題をさぐりて歌つかうまつりけるついでに

すみぞめの袖にもなほやうつさまし古枝にさける萩が花ずり

なか〳〵に人より物をなげくかな世をおもふ身の心づくしは

釋教の御歌の中に

夢のうちにさめむとおもふ心よりまだ見ぬさきぞ現なりける

神祇の歌とてよませ給うける

あきらけき日吉の影をたのみつゝのどけかるべき雲の上かな

〔以上續後拾遺集〕

西園寺に御幸ありて翫花といふ題を講ぜられける

に

萬代の春日を今日になせりともなほあかなくに花や散るらむ

七夕のこゝろを

たなばたにこゝろをかして歎くかなあけがたちかき天の河風

建長三年吹田に御幸ありて人々に十首の歌よませ

させ給うけるついでに

もろこしも同じ空こそしぐるらめからくれなゐに紅葉する比

弘長二年嵯峨にて十首の歌講ぜられけるついでに

河落葉を

我宿のものなりながら大井川せきもとゞめずゆく木の葉かな

建長三年吹田にて十首の歌講ぜられけるに

うきふしは數にもあらず賤たまきくりかへしては猶ぞ戀しき

〔以上風雅集〕

建長六年三首歌合に

吹く風のうらみは身にぞかへりぬる治れる世は花も散らじを

文永八年七月七日白河殿にて人々題をさぐりて歌

つかうまつりけるついでに七夕橋を

かつらぎの神ならねども天の川あくるわびしきかさゝぎの橋

亀山殿にて山家草花といへることを

いほしめて今こそ庭となりにけれ山のをのへのあきはぎの花

紅葉の歌とてよませ給うける

さらでだに紅葉にあける神南備の三室の山はなほしぐるなり

禁庭雪といふことをよませ給うける

白雪のいやかたまれる庭の面にはらひかねたるとものみやつこ

新三十六人撰第三句「庭の面をに作る。

文永八年七月七日白河殿にて人々題をさぐりて歌

つかうまつりけるついでに旅泊の心をよませ給うける

風あらきむしあげの瀬戸の夕やみに友よびかはす夜半の舟人

豊明をよそにきこしめしける年くらたまはすとて

雲の上を戀ふる涙のくれなゐに染めつるいろを君にくらべむ

祝部成茂七十の賀し侍るよし聞えければ思しめし

やりてよませ給うける

七十路の今日のためとやむかしより社の數をさだめおきけむ

〔以上新千載集〕

建長二年八月十五夜鳥羽院にて池上月といへることを講ぜられけるついでに

はちす葉の玉かとぞ見る池水のにごりにしまぬ秋の夜のつき

建長二年鳥羽殿にて野外鹿といふことをよませ給

うける

秋の野の尾花がもとに鳴く鹿も今は穂に出でゝ妻をこふらし

秋の御歌の中に

神代より幾よろづ代になりぬらむおもへばひさし秋の夜の月

五十首の御歌の中に羇中衣といふことをよませ給

うける

わけすぐる千種の花のすりごろもおもひみだるゝ旅の空かな

戀の御歌の中に

忘れじの言の葉なくばなか〳〵にとはぬ月日を恨みざらまし

新時代不同歌合第四句「とはぬ月日は」に作る、

月夜極樂を觀ぜさせ給ふとて

雲間よりいざよふ月にあくがれていとゞ西にも行くこゝろ哉

雜の御歌の中に

龜山の峰たちこえて見わたせばきよたき川をおとすいかだし

〔以上新拾遺集〕

五十首の御歌の中に

これぞげにはつねなるらむ聞く人も待ちあへぬまの郭公かな

人々題をさぐりて歌つかうまつりけるついでに恨

戀の心をよませ給うける

小夜衣かへすかひなきおもひねの夢にも人をうらみつるかな

戀の御歌の中に

八雲たついづも八重垣かきつけて昔がたりを見るぞかしこき

〔以上新後拾遺集〕

三心具足の三念佛を

言葉には三つと説けども一すぢにまことをいたす心なりけり

建長二年三首の歌めされけるついでに戀の心をよ

ませ給ひける

なれてこそ心にかゝれ玉だれの見ずば忘るゝひまもあらまし

雜の御歌の中に

荒れにけりまがきの苔の深みどり誰がぬぎかけし衣なるらむ

〔以上新續古今集〕

百首御歌の中に遲花

夢にだにまだ見ぬものをもろこしの吉野の櫻いかゞ咲くらむ

秋の御歌の中に

あしすだれ夕暮かけて吹く風に秋のこゝろぞうごきそめぬる

建長二年八月十五夜三首歌合のついでに

誰がよにか植ゑはじめけむいそのかみふるのに咲ける秋萩の花

建長二年八月鳥羽殿御會當座二首の御歌の中に曉

鹿を

有明のそらだのめなるつまこふとまつちの山に牡鹿なくらむ

月前鹿

月見てもなぐさめかねて鳴く鹿の聲すみのぼるをばすての山

泊五月雨といふことを

けふも猶とまりやせましからごとの日數ながびく五月雨の頃

寶治元年八月十五夜名所月を

見る人もやどかる月ももろともにちとせすむべき常磐井の水

雜の御歌の中に

かめのをの山のいはねの松が枝にむれゐるたづは心あるらし

三百首の御歌の中に

荒熊のなれて住むなるしはせ山山もいかにかはげしかるらむ

〔以上夫木抄〕

暮山鴈といふことを

たまづさは讀みもとかれじ墨染のゆふべの山をこゆる鴈がね

〔雲葉集〕

橋上落葉

山人はこゝろあてにや渡るらむ木の葉がくれの谷のかけはし

〔秋風抄〕

苔

おく山の谷には冬もよそなれやしもがれもせぬ苔のいろかな

鴈

何故にいざなはれつゝ鴈がねの行きては歸るならひなるらむ

〔以上現存和歌六帖〕

不輕品

あはれなりうきもつらきも聞きながらたへ忍びける人の心は

〔拾遺風體集〕

後深草天皇

神祇の御歌の中に

石清水ながれの末のさかゆるはこゝろの底のすめるゆゑかも

〔玉葉集〕

康元元年十一月東三條院女御に參り給ひける日

ゆふぐれを待つぞ久しき千歳まで變らぬ色の今日のためしを

弘安二年秋山のけしき御覽ぜむとて伏見殿へ御幸

ましく けるに鷹司殿の大殿もまゐり給ふべしと

聞えけるを物忌とてとまり侍りければ「伏見山いく

萬代も枝そへてさかえむ松の末ぞ久しき」とよみて

五葉の松につけて奏し侍りけるに御返し

さかゆべきほどぞ久しき伏見山生ひそふ松のえだをつらねて

〔以上增鏡〕

龜山天皇

詠百首和歌 弘安御百首也

春

よもの海浪をさまりて長閑なる我が日のもとに春は來にけり

谷風に岩間のこほりうちとけて春とはなみのおとに立つなり

おほかたに霞まぬ色もなかりけりいはとの關の春のかよひぢ

あら玉の春まちえたる空にさへこぞ見し雪の消えぬ野邊かな

新千載集下句「春もえいづる野べのさわらび」に作る、

もろ人の野澤の水にそでぬれてこほりのひまに若菜つむなり
やきすてし煙のすゑのたちかへり春はもえいづる野べの若草
梅が枝の花もこほりやとぢつらむ鶯のなみだいまだひなくに
梅が香をこづたふ枝にさきだてゝ花にうつろふうぐひすの聲
そことなきうはの空なる梅が香のにほひもあまる春の夜の袖
春風や柳のかみをけづるらむみどりのまゆもみだるばかりに
かすめどもまだ春風はそらさえて花まちがほにふれるあは雪
みわ山をたちかくせども春がすみ緑はしるきすぎのむらだち
へだてつる霞のうちもかすむかな雲をかさぬるはるさめの空
いまはとてなれし都をゆくかりのなみだをそれと春雨ぞふる
世のためも風をさまれと思ふかな花のみやこの春のあけぼの

白雲はよそにかゝりてかつらぎや花ぞたかまのみねの春かぜ
雲と見る花の木のまをもる月や春はおぼろのかげとなるらむ
あかでこそのちもたのまめ山櫻はなのなだての人のこゝろに
あだならぬ神の忌垣に咲く花も誘ふ風あればうつろひにけり
春くるゝ山のやまぶき八重までにいはねど花の色に出にけり

夏

枝かはす松のしづえをこえてこそ卯月にかゝれ池のふぢなみ
わぎもこがうすきころもの夏山はこずゑに今ぞ風もまたるゝ
卯の花の色やまがはむ夕ぐれはみどりの竹にかけしころもに
ときはなるその神山のあふひ草おなじふたばに年をふるかな
あさくらや木の丸殿の夕暮に我がなのりするほとゝぎすかな

郭公なきぬばかりにたちばなのかげふむ道をまたすぐるかな

菖蒲草いつの五月をひきそめて長きためしの根をもかくらむ

續拾遺集第二句「いつの五月に」に作る、

さみだれも晴れぬ鹽屋の夕けぶりたえぬや蜑の恨みなるらむ

あづまやのまやの軒端のみじか夜にあまりほどなき夏の月影

續拾遺集第五句「夏の夜の月」に作る、

夏もまだ月日ほどなきみそぎ河年のなかばやさても過ぎなむ

秋

今朝かはる秋とは風の音羽山おとにきくより身にぞしみける

飛鳥風いたづらに吹くよひ〳〵に秋ぞことふたをやめの袖

一夜のみたえぬばかりか天の河そのとし月のなかのへだてを

かなしさは人の心もいかならむわがためならぬ秋ぞと思へど

いへばえになほもの思ふ夕暮の露はなみだのゆかりなりけり

散りにけり鹿なく野邊の小萩原した葉の色ももみぢあへぬに

秋かぜに鹿なく山のゆふぐれは我もなみだのなほこぼるらむ

物をのみ思ひつらねてゆく鴈のなみだや露のかずをそふらむ

きり〴〵す枕かたしくよひのまも秋と忘るゝねはなかれけり

おしなべて月やひとつにやどるらむ花のちぐさの秋のしら露

月夜よし夜よしとぞいふわがやどの河音すめる山のあらしに

もろともに思はむ人に契らばや身にそふかげを月になしても

殘りける秋の日數をかぞへつゝ霜のよな〳〵うつころもかな

日かげまつほどばかりとや咲きぬらむ霧のまがきの朝顔の花

咲きまじるちぐさの花は霜がれて菊ばかりなる庭のいろかな

枝かはすよその紅葉のくれなゐにみどりをそふる松の一しほ

もみぢ葉も夕ゐる雲にうつろひてなべて染めける秋の空かな
もみぢ葉の下ゆく水にかげ見えて散らぬ梢ぞ根にかへりける
もみぢ葉はとまるゐぜきに澱めどもしぐれて過ぐる水の秋哉
なべて世の人もや袖をぬらすらむ今日ばかりなる秋の夕ぐれ

冬

神無月しぐるゝあとの夕日かげ秋にも似たる今日のそらかな
いつしかと霜こそむすべをざゝ原冬の日數のひと夜ふた夜に
神無月くもらでふるや槇の屋の時雨にたぐふ木の葉なるらむ
散りまよふ紅葉の色に山もとのあけのそほ舟なほこがるらし
木の間もるかげだになくてふけにけり中空にすむ冬の夜の月
葦鴨の玉藻のとこのうきまくらさだめぬ涙にまかせてぞ行く

續千載集第一句「散りまがふ」に作る、

にほの海やみぎはの千鳥こゑたてゝかへらぬ波に昔こひつゝ
きのふ今日みやこのそらも風さえて外山の雲に雪はふりつゝ
松ならでつれなき色と見ゆるかな冬のはやしにふれるしら雪
山賤のかきねに春もちかければとしのうちよりにほふ梅が枝

戀

思ふよりさきだつものは涙にて戀のしるべぞまたなかりける
したにのみ思ひそめぬる夕しぐれつひに心のいろは見えなむ
たれゆゑに亂れそめけむあぢきなく心の奥のしのぶもぢずり
我ばかりしのぶるなかにもるものはおさふる袖の涙なりけり
海山のはても戀路と思ふにはあはれこゝろをいづちやらまし
富士のねの煙の末は跡なくてもゆるおもひぞ身をもはなれぬ

身のうさを歎くなみだやくもるらむ月だに袖に影もやどさず
かり人の衣染むらむむらさきのゆかりの色のなつかしきかな
たのめてもまたいつはりに習ひけり淺きかげみる山の井の水
さのみやはつらき歎きもつらからむ心にかなふ思ひなりせば
ながらへばさてもあふよの頼みとて猶をしまるゝ我が命かな
ながらへてあれば我身の思出にうき言の葉もなさけなりけり
年月のあはぬつらさをかさねても猶たちかへる袖のうらなみ
よしさらばこれを我身の思出にあふにかへなむ後の名もがな
知らばやなあはれ我身の後の世をさのみつれなき物は思はじ
思ひわび衣かへしてねぬる夜の夢やまさしく逢ふと見るらむ
忘れじと今日まで契ることの葉も身にしられぬは心なりける
めぐりあはむその曉もいかならむ我につれなきありあけの月
おなじよに見しはうつゝもかひなくて夢ばかりなる人の面影
身に知れば我やひろはむおほとものみつの濱なる戀わすれ貝

雜

かたしきの夢の名殘もあけやらで霜よりひゞくあかつきの鐘
わがためにかくて千年はすぎなゝむ契をむすぶいはしろの松
契りおくちとせこもりて吳竹の葉かへぬ色の世々をふるかな
龜山のちとせのかげにすむ池のこゝの洲崎に田鶴ぞなくなる
くさか江の入江のたづも諸聲に千代も八千代も空に鳴くなり
かざしをる三輪の檜原の杉の葉や年ふる色のしるしなるらむ
あきらけきわがよの影と頼むかな月日の出づる關のあなたを

新後撰集第四句「千代に八千代と」に作る、

あふぎみる空なる星のかずよりもひまなきものは心なりけり

さてもげに長柄の橋のながらへて世を渡る身ぞ苦しかりける

津の國の難波のあしの世の中をのどかにとおもふわが心かな

我身こそ朽木の杣のいたづらにひく人なくて世にはまかすれ

立別れ日かずへぬればたびごろも露わくる野は袖もかわかず

春秋の日かずもとほくへだてつゝゆきゝになるゝ白河のせき

世のうさを苦のみだれの露わけてとふ人もなき秋のやまざと

みやこにて空にたゞよふうき雲の軒端の山にかゝるゆふぐれ

世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照し見るらむ

すべらぎの神のみことをうけきつゝいやつぎ〳〵に世を思ふ哉

神風や伊勢のをとめが袖たれて祈るひつきに我が世やすけむ

續千載集第四句「のどかに思ふ」に作る、

石清水神のこゝろにまかせてやわが行く末をさだめおくらむ

いつはりのなき世ならねば我が賴む神ぞたゞすの森のしめ繩

新拾遺集第五句「さだめおきけむ」に作る、

詠百首和歌 昭慶門院より被出之

早春

今よりはのどけかるらしかすが山さすや朝日も春のけしきに

嶺霞

春といへば嶺の霞はたちながら山はあらしのなほもさえつゝ

野霞

のぼりにし霞のすゑを思ふにもうきは嵯峨野のきさらぎの比

子日

ひきうゑし松は木だかき宿なればまたや千年を今日に始めむ

残雪

この里はさこそは雪も残るらめ山のをぐらのかげにまかせて

若菜

みやこ人いかゞはすらむやまかげの野澤の若菜春あさきいろ

竹鶯

暁のこゑこそかよへうぐひすのねぐらの竹はよのまこめつゝ

暁梅

あけやすきなごりぞをしき春の夜の夢より後の梅のにほひは

夕櫻

見る人のこゝろもさぞなつきぬらむ花もかつちる入相のかね

春雨

今はまた頼むかげなき我が身にもこゝろぼそきは春の雨かな

春曙

花のいろ鳥の聲をもきゝそへてげに世にしらぬ春のあけぼの

春月

春の夜は月のとがとはくもらぬを霞やなかのへだてなるらむ

歸鴈

かへる鴈なみだを知らぬ夕暮は聞く我のみぞまづなかれける

河柳

春かぜやなみにまかせむかたよりに古河やなぎいとも亂れむ

山花

うつし植うる山は吉野の花ながらかゝる例はあらじとぞ思ふ

里花

花見むとわれや都へいでなましとてもかくても山にすむ身は

落花

花のいろは春の日かずにうつろひぬあかぬ心の何にそふらむ

隣藤

枝かはす人のかきねの藤の花わがまつことはいまはなき身ぞ

歎冬

世のなかの人のこゝろのいろ見せて春は暮るとも咲けや山吹

暮春

今日くれて明日だに知らぬ世のうさにかたゞ〳〵惜しき春の暮哉

首夏

この比は卯月のみしめひきはへてところ〴〵に神まつるなり

卯花

いざよひの月は入りぬる名殘にて卯の花垣にかげぞとまれる

郭公

ほとゝぎすたのめぬ音をも年々に何と苦しく待ちならひけむ

花橘

長月の菊のまがきにつゆ消えて香をこそしたへ軒のたちばな

梅雨

五月雨の晴れぬ日かずにいひなしてことしはほさじ墨染の袖

夏月

みじか夜のまやの軒もる月影のほどなく明くる夏のそらかな

夏草

夏草のことしげかりしむかしにもあらずさびしき山の奥かな

澤螢

身にたらぬ思ひはたれもあるものを澤の螢のいかにもゆらむ

納涼

さすがまた都にもにぬけしきかな秋をも待たぬ松のあらしは

夏祓

うきことを何にたむけむみそぎ河神もゆるさば夏はらへせむ

初秋

なにとなくおどろかれける風の音もげに思ひしる秋の空かな

七夕

たなばたの心長さはためしにて誰しらいとをかしはじめけむ

簷荻

さゝがにのやどりくるしきしら絲のこゝろみだるゝ荻の上風

萩露

秋萩のうつろふかたの下露やものおもふ人のなみだなるらむ

岡薄

水莖の岡のやかたに風すぎてひとむらすゝきたれまねくらむ

籬槿

世の中は夢かうつゝかあさがほの花のまがきの露のよすがも

苅萱

ひとかたになびきもはてず苅萱のたゞこの比の人ごゝろかな

夜蟲

ながき夜の思ひありとも鳴く蟲のこゑぞ枕にかつかよひける

朝鹿

旅人のあさたつ野邊は霧こめてをのへの鹿はみねに入るなり

秋夕

もの思へと誰かならはす秋ぞとてゆふべをわきて涙おつらむ

初鴈

かへるさに今年もきゝし鴈ぞかし秋の日かずぞ今いたりぬる

待月

待つほどの心晴れぬる我身には出でぬに見ゆる月のおもかげ

見月

みな人のこゝろ〳〵に月を見ばくもらぬ影も曇るとやいはむ

惜月

あやにくに惜しからぬ身にをしまるゝ月は入方の秋の山の端

海霧

わたつうみのとわたる舟のゆくへしもほのかになりぬ霧の遠方

擣衣

もの思ふとねられぬ賤がなぐさめに幾夜かさねて衣うつらむ

垣葛

秋風にたれかうらみとよろふらむ葛はふ垣のなかのへだてを

紅葉

露霜にたへぬ木の葉やかつ〳〵も時雨をまたず色に出ぬらむ

谷菊

いく秋もおいせぬ菊のかげとめてちとせすむべき谷のした水

暮秋

かぎりある秋よりほかに夢と見しながきわかれの長月のそら

初冬

我ばかり身をやつしぬる藤ごろも人は冬とやたもとかふらむ

時雨

とにかくにもろきなみだの神無月袖より山にしぐれゆくなり

落葉

大井川ゐぜきの水のくれなゐにわれとあつまる峰のもみぢ葉

路霜

わけすぐる道のさゝ原冬きては霜こそむすべひと夜ふた夜は（に歟）

水鳥

をしがものすむ池水はさゆる夜も思ひありとや氷らざるらむ

千鳥

さびしくてかたらふ人もなき身には友なし千鳥我にことへ

冬月

山たかくつたふる木の葉散りて後まほにぞ月の影やどしける

淺雪

風さえて枯野のすゝき雪ちればのこる尾花ぞかずまさりぬる

深雪

わけわぶる谷の細道けふしこそみちありけりと雪つもりぬる

歳暮

うきことの日數にそへてつもりぬる今年の暮は惜しまれぬ哉

初戀

まだ知らぬ戀はいかなる涙ぞとうさになれぬる袖にとはゞや

忍戀

つゝむとて下の思のよわらばやげに世を忍ぶこゝろなるべき

顯戀

くれなゐも涙のいろのあらはればいつはりもなき心とは見む

見戀

かぎりなき心うつりておもかげを見るは思のますかゞみかな

聞戀

なか〳〵にありとは聞きてあはぬよは幾度心ゆきかへるらむ

增戀

きのふより今日はあだなる我が涙今いくかありて袖の瀧つ瀨

近戀

いかゞせむ心のうちのへだてをば枕かはしてあまたねつれば

遠戀

から國のしらぬさかひを隔つともかよふ心のすゑはあひなむ

契戀

ゆくすゑはいかに契もたのまれずたゞ目のまへにかはる心は

憑戀

此世にはいつはりもせぬ身としらば我が言の葉ぞ人も賴まむ

待戀

たのめしも人はなげなる言の葉を我やわすれず暮を待つらむ

逢戀

一夜とぞ我があふ事をいのりしにまたこの後に何となげかむ

別戀

かぎりあれば袖の涙もつきぬらむ身にはじめたる別ならねど

恨戀

なつかしく思ひし中のかはるとて恨めしといふ人はあらぬか

稀戀

たなばたもたえぬ一夜はよかれせず三年にみつる君が面かげ

厭戀

厭はるゝ身の上しらぬ涙こそさもあやにくにこゝろよわけれ

隱戀

おもかげを雲のいづくにやどすらむそらがくれする有明の月

隔戀

あはれげに知らばや人の言の葉を心のそこのいくへありとも

久戀

こひわたるその名ばかりはかひもなし長柄の橋の昔ながらに

絶戀

片絲のたえなばたえねなか〳〵にあふをあふとも賴まれぬ身は

曉鷄

よな〳〵のあかつき深き寐覺には我よりのちぞ鳥も鳴きける

晩鐘

あさましやうちまどろめば今日も又暮れぬと鐘の音ぞ聞ゆる

夜燈

このよには消ゆべき法のともし火を身にかへてこそ我は照さめ

庭松

色かへぬ宿のかざしとなりにけり庭にむれたつ松のひとむら

窓竹

うきふしをしらぬ宿にてすごすとも思ふかたにはなびけ吳竹

名所

音にきくよもぎが嶋の跡とめてかめのを山にわれいへゐせり

故郷

春をまつ日かずも今はちかきかなよしの丶宮のうしや世の中

山家

すみなるゝ山のおくなる家居にはみやこぞ旅の心ちなりける

幽栖

おとづるゝたよりも淋し人ならでかけひの水と山のあらしと

羇旅

東路はきゝても遠き旅なれどこゝろのおくはへだてなきかな

旅泊

いづくをかさしてとまりと思ふべきうきたる舟の風を待つ身は

眺望

春の花秋の紅葉のいろ〳〵もところからにぞをりをしてみる（りけ歟）

孤夢

うきことも身の思出もすぎぬればゆめならでやは昔みるべき

寢覺

長き夜もまどろまでかつあけぬればいつを寢覺の心ちだにせず

述懷

變りぬる身は我身とも思ほえず世はよにまさるひとこともなし

懷舊

忘られず過ぎにし事はかず〳〵によその事まで思ひ出でぬる

無常

春と秋とひだりも右もぬるゝ袖わがふたおやのなき月日とて

神祇

ゆくすゑもさぞなさかえむ誓あれば神の國なる我が國ぞかし

釋教

まよひつる人をみちびくたよりなる佛の法は我がことの葉よ

祝言

すゑとほき千代のためしの姫小松なほ榮えよと契りおくかな

昭慶門院より被出之

閑居早春

時わかず世のはえもなき山の奥は我とぞ春をおもひなしける

たづねとふ人はまれなる我宿にところきらはず春ぞ來にける

處々子日

ゆくすゑを今日の子日に契るかな千年の數もあまたところに

橋上霞

おほゐ川すゑなるはしはなか絶えて霞ぞわたる春のかよひぢ

野若菜

すみなるゝ春の嵯峨野の若草をゆきゝの道にいまぞ摘みける

鶯留客

ことはすぎゆく人は鶯の鳴きても告げよなさけありとは

梅風遠薫

いろ見えでいく里こえてしらるらむ梅さきぬとは春の山かぜ

苔庭殘雪

山かげの苔のみどりのあらぬ色にさえて殘れる庭のしらゆき

河春月

ひさかたの月のかつらの山水もおぼろなればや春をしるらむ

幽閑春雨

しづかなる我が宿からの思ひなしに猶すぎてこそ春雨はふれ

岸柳曳浪

みどりなる岸のやなぎの池水にうつるすがたに浪ぞかずそふ

花滿山

こゝろざし深くうゑける山ざくら松よりしげく花を見るかな

色ふかくうゑおく花の年ふりて□山ざくらかな

落花埋路

ふみわくるあとだに見えず櫻花あまた木末□散りつもりつゝ

故郷のおもかげさへぞわすれぬる花にまよへる志賀の山みち

山吹浮水

やまぶきの花をうつせる水の色のちとせすむべき井手の玉川

松外藤

色そへてかざりし松をよそにして我ばかりなる藤のむらさき

枝かはす松を□□ふぢなみの春の末葉に咲きにける□

老後暮春

あはれわが今は老とやなげかましよそぢの後の春もいつたび

一本上句「今は我老いぬる年になげくかな」に作る、

忍戀二首

あぢきなくしのぶ〳〵といつまでか戀に我身をそへて歎かむ

なか〳〵に心はあだとなりにけり思ひいれずば忍びはてまし

逢戀二首

あふみなる山を□□けふこひて後も苦しく我なげゝとや

なか〳〵に侘しき物をあひそめてかへらむと思ふ程の名殘は

一本上句「あひみずて年月へける心より」に作る、

契戀二首

契りおくことはたがはであひ見ばや我世もしらず人の身もいさ

さすがまたいひし月日を□るはわが僞にひとけ□

別戀二首

おもかげを二つにわりします鏡これや限りのためしなるべき

見るたびにこれや限りに有明の月こそよしとかへるさのみる

絶戀

ゆく鴈のつらをはなるゝ人めをもたえても絶えぬ契とぞみる

旅

いまは我野にも山にもすみなれてみやこぞ旅の心ちなりけり（る歟）

述懷

とにかくに思へばものゝ思はれて思ひ入れねば思ふ事もなし

祝

ちはやぶる（やほよろづ）神の定めむわが國はうごかじ（さかえむイ）ものをあらがねの土

詠十首和歌

山霞

いとゞまた都をとほくへだつらむ山はかすみの名にたてる春

谷鶯

もろともに世を春ならぬ心ちして谷の戸いでぬうぐひすの聲

梅風

たちよらば袖にありかを吹きとめて匂をうつせ梅のしたかぜ

歸鴈

春秋をおなじみやこにかへつればいまやこしぢの初鴈のこゑ

待花

咲きなばとおもふばかりのけしきにてげに花さかぬ山櫻かな

忍戀

よしやたゞわが心をばわれぞ知る人のためにはなに忍ぶらむ

逢戀

何とこのあふはあふにてさてやまで見るにも落つる涙なるらむ

別戀

うしといふ有明の空の月なくばおもかげとめぬ別れならまし

述懐

世の中に思ふ事なき我身かなとてもかくてもあるにまかせて

祝言

かめのをの岩根の瀧のしらいとのしらずこの後幾世へむとも

詠五首和歌

庭夏草

ふみわけてとふべき人もなき身にはやどからしげる庭の夏草

夕蟬

思ひ出づやことしげかりし昔をも夕ぐれいそぐ蟬のこゑには

雨後納涼

ふりつゞく雨晴れぬらし夕ぐれの苔のたもとに風かよふなり

寄螢戀

よそにやは螢をも見む夕ぐれのもゆる思ひもわれやなになる

寄道釋教

常にゐるはちすのうへの心をやまだ知らぬ人は玉とあざむく

詠十首和歌

朝霞

峰こめて空にかすみはうづめどもよそにうつろふ朝日影かな

子日祝言

君がためいかにかいはむ姫小松なべて子の日の松の千とせを

五月雨久

おもかげも忘るばかりに雲とぢてこの月はみぬ五月雨のそら

蟬聲近

はるかなるかた山陰の木づたひを風に聞きよるひぐらしの聲

樹陰納涼

やほかゆく外面の木かげたちよれば秋ふ□くして風ぞすゞしき

水鳥馴

さゆる夜は上毛の霜ぞかさねけるつがはぬ鴛鴦のよるの衾も

寄星戀

□いかにあふせのなかるらむ二の星の一夜まちえて

寄川戀

せく袖のつゝむにあまる思川おもひぬるめは絶えずこそゆめ

寄鳥戀

一本上句「秋の夜も長しといはぬためしかな」に作る、

あぢきなや我はみじかきこゝろにて山鳥の尾のながき戀をば

寄國祝

うれしくも豐蘆原のよし〳〵とわがすゑ〳〵のまぼるべき國

詠十首和歌

新月透松

いでやらぬかげを□めぐ見ゆるかな月よりうへの松の村立

明月滿庭

今宵こそよにみちぬらめ秋の色のくもらぬかげの月はひと庭

山月聞鐘

月すめばまた誰が里と聞ゆなり風のつてなる山おろしのかね

河月浮舟

秋風の月のかつらのうかひぶねくだすか浪の瀬々さわぐなり

曉月近嶺

いでゝさはつれなかるべき有明のこの山もとはいりがたの影

月前忍戀

曇りなき影さへ身には厭ふかなあらはれぬ名を月によそへて

月前逢戀

あひみてもさてすみはてぬ月のかげ人の心とわがいのちとに

月前契戀

思ひいでば身にそふかげと契りしに月ばかりなる閨の淋しさ

月前怨戀

ことうらの月をながめし心より秋かぜさむしあさのころもで

月前絶戀

ちぎりしもわがなかぞらの浮雲のたえま〳〵に月はへだてぬ

詠五首和歌

山月聞鹿

こよひこそ月にあらしの音すみて尾上に鹿のこゑおくるなり

山の端の雲はあらしにあとなくて月にみがけるさをしかの聲

すみのぼる聲もみ山を出でにけり月におくれぬ小男鹿のこゑ

河上見月

涙のうへもひかりみちたる月かげに河音すめる秋の夜半かな

秋の夜おほる川ふけゆく河のはやき瀬をくだればのぼる月の影かな

庭月照菊

むすびおく露をば月のやどりにてひかりそへたる庭のしら菊

月下待戀

頼めねばいつはりとだに人をいはでわが思寐の月ぞふけぬる

曉月別戀

鳥のこゑ鐘のひゞきにかへるさの月より外もわれしたふなり

詠十首和歌

月山中友

我のみぞみ山の秋もなれにける月の出で入るすみかしめゐて

月帶嶺雲

山の端を出でぬとかげは見えながら月によこぎる峰のしら雲

月向曉雲

長き夜もしられぬまでに更けにけりわく方もなく月をのみ見て

月動旅思

思ひやれば都ぞ旅になりにけるわれにおくれぬ月のかげ見て

月催懷舊

かずとりてさのみや月にうれふべき身もあらぬよの昔語りを

月顯忍戀

くもりなくてしのびはつべき契かはそらおそろしき月の光に

月增久戀

幾年の秋をか經けむつれなさを月にかこちてながらふる身は

月驚絶戀

夜半の月見ざらましかば絶えはてしその面影も又はあらじを

月滿枕戀

袖もひぢまくらもうきて涙のみよもにみちぬる月のかげかな

いかにして月をとゞめむなかぞらにかはす枕の秋のひとよを

月宿袖涙

ほしあへぬ袖の下ゆくなみだ河月やどれとはちぎらざりしを

暮秋詠十首和歌

池亭暮秋

くれてゆく秋のあらしの山ちかくわがすみなるゝやどの池水

山館暮秋

くれかゝる夕日の峰にやどとへばもみぢの外もくれなゐの山

幽居暮秋

夫木抄第一句「うつりゆく」に作る、

さらば又わが住む里の淋しさにしられて秋もよそに行けかし

河上暮秋

大井川くれぬる秋のはやき瀬をとりあへぬさをにくだす筏士

古寺暮秋

秋はいま今日くれぬとぞおどろかすむかひの寺の入相のかね

林頭暮秋

夕しぐれそめつる色をのこしつゝ雲のはやしに秋はかくれぬ

野外暮秋

結びおきし尾花が露もかれ〴〵に野邊より山に秋はすぐなり

暮秋忍戀

ゆるしなき心のうちのなみだかなころは紅葉の色にいづれど

暮秋別戀

とゞまらぬならひありとは慰めて秋もわかれぬきぬ〴〵の空

暮秋懷舊

九日のこぞのかざしはうけれども今はかたみの庭のしらぎく

詠庭落葉和歌

木ずゑをば風のさそふと見しかども庭は紅葉の山となりけり

詠三首和歌

野冬月

さびしさは色もひかりも更けはてゝ枯野に露のありあけの月

庭淺雪

月かげやさえたる色をさしそへむ露のふるのゝあけがたの空

新續古今集第四句「枯野の霜に」に作る、

人はいま庭のをしへのあさき世に身ぞうづもるゝけさの白雪

ふるまゝにみ山の松は枝たれてかきねは雪のまだあさきかな

契久戀

あはぬまに涙こしすぎてすゑの松まつぞ久しき契りのこせる

契るともさのみやまたむ年月をわが世もしらず人のこゝろも

年へてもあふにかふべき契なれば知らぬいのちに涙くらべむ

詠三首和歌は以上三題を指す、

栽花

おいらくの後の春とはしらねども今年も花はうゑそへてける

庭花

よそに見てしらぬあたりの花よりもやどから惜しき山櫻かな

近花

植ゑおきし花はむかしと匂ひきてやどから近きあらし山かな

遠花

きさらぎや花かあらぬか葛城の雲こそかゝれよそのながめに

寄花來戀

忘れにし宿とはしらではるゝと花の木末にたづねきにけり

寄花久戀

さきそめてあだなる花にならひせでつれなくすごす人心かな

已上各短册被遊之

籬菊

くれて行く秋の日かずのうつろふをまがきにのこす白菊の花

山紅葉

み山べやしぐるゝ雲をわけいれば紅葉も秋もふかく見えけり

惜暮秋

別れにし秋に今年もあひぬるを今宵ばかりと惜しみかねつゝ

契待戀

たのめずばたゞ大かたにまちやせむわきて身にしむ入相の鐘

恨絶戀

恨みてもさすがなれにし面影のうかりし[　]もたえむとや見し

已上九月盡五首懐紙被遊之

河氷

さす棹に涙もくだけて大井川こほりの瀬々をくだすいかだし

題不知

さだめなき時雨はもとのしぐれにてめぐりもあはぬ君が面影
大井川ところをかふるおなじ名もひとつ流れと君やくみしる

〔以上亀山院御集〕

春の御歌の中に

百千どりけさこそ來鳴けさゝたけの大宮人にはつね待たれて
月華門院に梅花奉らせ給ふとて
君さそふしるべにぞやるうぐひすもきゐる軒端の梅の匂ひを

秋の御歌の中に

秋來てはかくこそありけれ吹く風のおとさへつらき庭の荻原
いくとせの秋の一夜をかさぬらむおもへば久しほしあひの空

暮山雪といふことを

まがきには山かと見ゆる夕ぐれはをのへにつゞく庭のしら雪

豐明節會をよませ給うける

雲のうへのとよのあかりに月さえて霜をかさぬる山藍のそで

見戀の心をよませ給うける

契りをばあさかの沼と思へばやかつみながらに袖のぬるらむ
うへのをのこども寄垣戀といふことをつかうまつりけるついでに

葦垣のまぢかきかひもなかりけり心かよはぬなかのへだては

五首の歌講ぜられけるとき寄夢戀を

おもひつゝぬる夜も人のつらきかな夢も現の見ゆるなりけり

戀の御歌の中に

ながらへむ人の心はいさや川いさわればかり戀ひわたるとも

弘長三年二月龜山の仙洞に行幸ありて花契遐年と
いふことを講ぜられし時

尋ねきてあかぬ心にまかせなば千とせや花のかげにすぐさむ

〔以上續古今集〕

増鏡第五句「かげにすごさむ」に作る、

位におはしましける時うへのをのこども雪中梅と
いへる心をつかうまつりけるついでに

折りてこそ花もわかるれ梅が枝におなじ色そふ春のあはゆき

庭落花といへる心をよませ給うける

今はとて散るこそ花のさかりなれこずゑも庭もおなじ匂ひに

萩をよませ給うける

みやぎ野の木の下露もいろ見えてうつりぞまさる秋はぎの花

暮天聞鴈といへるこゝろを

遠ざかる聲ばかりしてゆふぐれの雲のいづくに鴈の鳴くらむ

人々題をさぐりて歌つかうまつりしついでに月前
眺望といへる心をよませ給うける

あらし山そらなる月はかげさえて河瀬の霧ぞうきてながるゝ

紅葉をよませ給うける

もみぢ葉を今一しほとことづてむしぐるゝ雲のすゑのまつ山

人々題をさぐりて歌つかうまつりしついでに落葉
浮水といへる心を

大井川ゐぜきに秋のいろとめてくれなゐくゞる瀬々のいは波

建治二年八月龜山殿にてはじめて松色浮池といへ
る題を講ぜられ侍りしついでに

よろづ代と龜の尾山の松かげをうつしてすめる宿のいけみづ

寄杜戀といへる心をよませ給うける

よしさらば言の葉をだにちらさばやさのみいはでの杜の下風

弘長三年九月十三夜十首の歌めされしついでに月

前別戀といへる心を

きぬ〴〵の名殘を月にかこちてもうしとぞ思ふありあけの空

文永五年八月十五夜の歌合に月驚絶戀

何とまた思ひ絶えても過ぐる身の月見るからに袖のぬるらむ

位におはしましける時うへのをのこども寄海戀と

いふことをつかうまつりけるついでに

思ひあまり袖にも波はこえにけりありしにかはる末のまつ山

石清水の社に御幸ありし時よませ給うける

石清水たえぬながれは身にうけつ我が世の末を神にまかせむ

神祇の心をよませ給うける

今もなほ久しく守れちはやぶる神のみづがき世々をかさねて

〔以上續拾遺集〕

百首の歌よませ給うけるとき霞を

山風はなほさむからし三吉野のよしの〻里はかすみそむれど

春の御歌の中に

折らばまた匂ひや散らむ梅の花立ちよりてこそ袖にうつさめ

百首の歌よませ給うけるとき花を

春風に咲きぬる花の宮木もりこゝろゆるすなやどのさくらを

百首の歌よませ給うけるとき霍公を

郭公何かこゝろをつくすらむわれきけとても鳴かぬものゆゑ

秋の御歌の中に

秋はたゞもの思へとや荻の葉の風も身にしむゆふべなるらむ

見る人のこゝろにまづぞかゝりける月のあたりの夜半の浮雲

ほどもなくうつろふ草の露のまに今年の秋もまたやくれなむ

百首の歌よませ給うけるとき萩を

いとゞまた折りてぞまさる秋萩の花のにしきの露のたてぬき

文永七年八月十五夜五首の歌召されしついでに野

月をよませ給うける

見るまゝにこゝろぞうつる秋萩の花野のつゆにやどる月かげ

位におましゝけるとき深雪といふことをよませ

給うける

かぎりあれば深きみ山もいかならむけふ九重につもるしら雪

旅のこゝろを

岩根ふみかさなる山の遠ければわけつる雲のあとも知られず

文永七年冬のころ内裏にて寒の御祈の爲に如法佛

眼の法修じ侍りけるとき雪の降りて侍りければ天

台座主道玄承元の昔の跡を思ひて「九重に降りしく

雪はいにしへの法のむしろにあとや見ゆらむ」とよ

みて奏し侍りけるに御返し

いにしへの跡を知らせて降る雪のたのむ心はふかくなりぬる

戀の御歌の中に

くれなゐの涙のいろもまがふやと秋はしぐれに袖やかさまし

百首の歌よませ給うけるとき恨戀を

とはゞやな恨みなれたる里の蜑もころもほすまはなき思かと

百首の歌よませ給うけるとき曉を

しづかなるねざめ夜ぶかき曉のかねよりつゞく鳥のこゑ〳〵

山家のこゝろを

さびしさも誰にかたらむ山かげの夕日すくなき庭のまつかぜ

つかさめしのころ爲世が參議望み申すとて前大納

言爲氏「和歌の浦にひとり老いぬるよるの鶴の子の

ためおもふねこそなかるれ」とよみて奏し侍りける

に御返し

和歌の浦に子をおもふとて鳴く鶴の聲は雲居に今ぞきこゆる

後嵯峨院の御事ののち龜山殿にてよませ給うける

大井川ゆく瀬の浪もおなじくばむかしにかへれ君がかげ見む

祝の心をよませ給うける

みかさ山いのる心のくもらねば月日とともに千世やめぐらむ

弘安三年九月十三夜人々に十首の歌めされしつい

でに月前祝を

もろともにおなじ雲居にすむ月のなれて千とせの秋ぞ久しき

〔以上新後撰集〕

庭梅といふことを

あかなくのにほひを散らす梅が枝の花にいとはぬ庭の春かぜ

花の盛に雨ふり侍りける日西園寺に御幸ありて花

御覧ぜられける時よませ給うける

春雨のふる木のさくら今日しこそをりえて花の色も見えけれ

花の御歌の中に

山の端に入日うつろふくれなゐのうす花ざくら色ぞことなる

昭慶門院御屏風押色紙和歌第一句「わすれじよ」に作る、

虚橘をよませ給うける

わすれずよ右のつかさの袖ふれし花たちばなや今かをるらむ

鵜河

大井河鵜舟のかゞりほのみえてくだすや涙のよるぞしらるゝ

八月十五夜月の御歌の中に

いくほどゝ思へばかなし老の身のそでになれぬる秋の夜の月

雑の御歌の中に

いくほどかながらへて見む山櫻花よりもろきいのちと思へば

〔以上玉葉集〕

位におまし〳〵ける時うへのをのこども鶯の歌つかうまつりけるついでによませ給うける

谷ふかき古巣を出づるうぐひすの聲聞くときぞ春は來にける

位におまし〳〵けるとき後一條入道前關白左大臣所々の花見侍りて一枝折りてたてまつるとて「君がため知らぬ山路をたづねつゝ老のかざしの花を見

るかな」とよみて奏し侍りけるに御返し

たづねける知らぬ山路のさくら花けふ九重のかざしとぞ見る

忍戀のこゝろを

知らせばや岩もる水のたよりにも絶えず心のしたにせくとは

戀の御歌の中に

さりともと猶たのまるゝ夕暮をちぎりしまゝにとふ人もがな

雪の深く積りて侍りけるに性助法親王のもとにつゝかはされける

むかしより今もかはらず頼みつるこゝろの跡ぞ雪に見ゆべき

弘安七年九月九日三百首の歌講ぜられけるとき菊

花宴久といふことを

ちとせまでかはらぬ秋はめぐりきてうつろはぬ世の菊のさかづき

〔以上續千載集〕

位におましゝけるとき題をさぐりて詩歌を合せられけるついでに禁庭花といふことをよませ給うける

我が宿の雲居のさくらいくたびかおなじ千とせの春を契らむ

布引の瀧御覽じにおはしましたりけるに御ともにさぶらふ人々歌つかうまつりけるついでに

白絲の世を經て後のためしかな今日わが見つるぬのびきの瀧

〔以上續後拾遺集〕

永仁五年五節のまゐりの日伏見院に申させたまう

ける

面影も見るこゝちするむかしかな今日をとめ子が袖のしら雪

〔風雅集〕

秋の御歌の中に

葛城や久米路の橋は月もなほなかぞらにこそ澄みわたりけれ

雪のふりける朝賀茂の社に御幸侍りけるに前大納言爲世いまだ中將にて御供に侍りける許へ從三位氏久より「年を經てかはらぬ色の榊葉につもるみゆきは神ぞうくらむ」とよみて榊の枝につけておくりけるに院このよしきこしめして

今朝もまた祈るこゝろの跡みえてたのみをかくる雪の白ゆふ

嘉元の百首の御歌の中に川

絶えせじな後のさが野のすゑとほくとみの小河の流あまたに

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

春立つと日影も空に知られけりかすみそめたるみよし野の山

秋の御歌の中に

花すゝき袖になみだの露そへて暮るゝ夜毎にたれまねくらむ

逢不會戀

つらきかな待ちしにかはる夕暮を身は憂きときと秋風ぞ吹く

嘉元の百首の歌めしけるついでに松を

いたづらにみのゝを山のまつことともなき我ながら年ふりにけり

〔以上新拾遺集〕

曙雪を詠ませ給うける

ほの〴〵と明け行く山の高嶺よりよこぐもかけて降れる白雪

〔以上新後拾遺集〕

弘安八年十月住の江に御幸ありて行旅述懐といふ

ことをよませ給うける

住吉の松はためしも知るらめや二代のあとにかへるうらなみ

〔新續古今集〕

嘉元元年壬十二月の御歌の中に夕梅

そことしるにほひなからば梅の花夕闇みちはよそにすぎまし

十首の御歌の中に關路花

たちどまる霞の關のあけぼのに花もいくへかにほひそふらむ

昭慶門院御屏風押色紙和歌第五句「色となしけむ」に作る、

嘉元元年百首の御歌の中に山吹

山吹のたがあやまちに咲きそめて冬をばよその色としもなし

嘉元元年百首の御歌の中に初秋

天津風そらにたちつゝあらがねの土のいろにぞ秋も見えける

嘉元二年百首の御歌の中に鹿

つたへみる山はあらしのわが宿となれてもあかぬ小男鹿の聲

嘉元三年百首の御歌の中に九月盡

秋の色はこゝのつわけてすぎぬなり殘る一夜の影ぞさびしき

庭落葉

九重につもるもみぢの色ぞこきたましく庭もひかりそふまで

冬の御歌の中に

きのふけふみやこの空もかぜさえて外山の雲に雪はふりつゝ

弘安元年九月詩歌合のついでに仙家勝趣

春秋をこゝにとゞめて年をふるわがすむ宿やこの名なるべき

正應五年白河殿の五十首歌合に

こゝに見る春の小山田うちかへし思へば花もむかしこふらし

〔以上夫木抄〕

嘉元百首の歌に霞をよませ給うける

おもかげや春のそらにもたちぬらむわけて霞の色は見えねど

嘉元百首の歌よませ給うけるに

命にもかへばやとおもふ心をば知らでや花のやすく散るらむ

嘉元百首の歌よませ給うける、ついでに納涼のこゝ

ろを

涼しさやかつ〳〵したにかよふらむ岩こす水の秋のこゝろは

〔以上藤葉集〕

位さらせ給ひてのち齋宮瑩子内親王の御かたへし

のびて

夢とだにさだかにもなきかりぶしの草の枕につゆぞこぼるゝ

弘安八年二月北山殿にて御遊のついでに

もゝいろといまや鳴くらむ鶯もこゝのかへりの君がはる經て

弘安十年御乳母按察使二位が一めぐりの佛事に龜

山殿へおはしましていかめしう八講行はせ給ひけ

る日雪いたうふりければ九條三位隆博檜扇のつま

を折りて「跡とめてとはるゝ御代のひかりをや雪の
中にもおもひ出づらむ」とかきて女房の中に聞えた
るを院御覽じて御かへしに

なき人のかさねし罪も消えねとて雪の中にもあとをとふかな

乾元元年六月十六日後二條院龜山へ行幸ありてあ
かつきかへらせ給ひてのち法皇より内へ

慕はるゝ名殘にたへず月を見れば雲の上にぞかげはなりぬる

〔以上增鏡〕

嘉元三年御心地例ならずおはしましけるに九月九
日北山の入道大相國菊の花をかざりてまゐらせけ
れば重陽の宴をやおぼしめし出でさせたまひけむ

この花もあすより後はしらぎくの年々に見し千代のかざしぞ

その御あとの事どもおぼしめすまゝにおほせおか
れける御ついでに

人は皆あらましにだになぐさむに思出おほき我がむかしかな

〔以上日吉社竝叡山行幸記〕

歴代御製集卷八終

328
372

終